中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1376

人間のうちにある諸の欲望は、常住に存在しているのではない。欲望の主体は無常なるものとして存在している。

（釈迦）

＜解説＞欲望は誰にでもあり、無常で絶えず変化する。何かの刺激と誤った受け取りと、認識や思考などで欲望は煩悩として煩わし悩ますものとなる。その過程は無常である。常住ではないから、その変化を観察して欲望の煩悩化を防ぐこともできるはずだ。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.18 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1377

如来の説いた法と律とにおいて出家したならば、以前の名と姓を捨てて、ただ「道の人・釈子」とのみ称す。

（釈迦）

＜解説＞すでに苦しみを克服した人の導き、教えにおいて、実践の道を歩み始めたならば、それ以後は、その人は、それまでの世間的な身分や地位などは消え去り、すべては等しく、道を歩む人であり、釈迦の子と呼ばれるのである。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.19 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1378

大きな資産を得ても長く続かない家系は、四つの原因、もしくは、その一つの原因によって長く続かない。四つとは何であるか。

（釈迦）

＜解説＞四つとは、1、自分がなくしたものを探し求めないこと、2、古くなったものを修理しようとしないこと、3、飲食に節度がないこと、4、戒めをまもらない女または男に資産を管理させることである、と説明されている。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.20 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1379

ものごとの一部分だけを見る人は異論をたててそれを言い争う。

（釈迦）

＜解説＞全体の姿が見えない、あるいは本物を見たことがない。全体のある部分だけをみて、それが一部分だと知っていれば問題ないが、それをもって、これのみが真実だという。他の人も同じ態度ならば、そこに争いが生じる。言い争いする努力を本物を見る方向へ向けなくてはならない。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.21 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1380

我もし道を得ば、願わくは彼を引摂せん。彼もし道を得ば、願わくは我を引摂せよ。乃至、菩提まで互いに師弟とならん。

（源信）

＜解説＞自分が道を得たなら彼を導こう。彼が、弟子や若い人であっても、道を得たならば私を導いてほしい。悟りを開く（菩提）まで互いに進もうではないか。師弟とは向かい合っているのではなく、同じ方向を向いて進む仲間でもある。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.22 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1381

人間的であるがゆえに、インド的でもなければヨーロッパ的でもない、人間の心の親しい鼓動を感じる。

（ラーダークリシュナン）

＜解説＞国々や民族の間には対立が生じている。しかし、広い視野をもって真実の姿を見よう。何が重要であるかを知る洞察力があれば、互いに異なるところはありながらも、普遍的な大切なもの（人としての道）に気づくのではないか。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.23 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1382

楽については友情を感じ、苦については同情を感じ、徳に関しては喜びを感じ、悪に関しては平静であることを修することによって、心を濁りなく澄ませるのである。

（『ヨーガスートラ』）

＜解説＞他人の幸福には喜び、苦しむ人には同情、徳ある人には喜ぶこころ、悪い行為をもつ人には無関心（憎悪や共感を持たない）という実践をすべき。それで、心が静まり澄んで、安楽の境地に達する。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.24 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1383

楽や苦を感じたら、それを自分に由来するとも他人に由来するとも思ってはならない。苦楽を感じるのは執着による。執着がなければ何によって苦楽を感じるであろうか。

（釈迦）

＜解説＞苦しみの原因は、主体としての自分か、客体としての対象物であるか。この点に関して、どちらも根本原因でなく、両者の関係で生じる執着によるのだと説く。この執着を断たなくてはならない。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.25 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1384

罪悪を罪悪として認め、それを厭離せよ、離貪せよ、離脱せよ。

（釈迦）

＜解説＞ここでの要点は二つ。まず、罪悪をはっきりと見ること（罪悪を罪悪であると認める）。そして、次に、その罪悪を厭離する（厭いそこから離れ去る）、離貪する（愛執を離れる）、離脱する（そこから自由になり解放される）こと。そうすることで苦しみを乗り越える。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.26 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1385

敬われているときも、また敬われていなくとも、その両者であっても、怠けることなく住するものには、精神統一が揺らぐことはない。

（釈迦）

＜解説＞敬われることで、敬われないことで、人々はときに、動揺しては、正しく見る心がなくなる。動揺して、結局は苦しみの境涯に入ってしまうのである。この点に十分注意して、精神統一が揺らぐことがないようにするのがよい。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.27 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1386

コンプレックスに囚われて動けなくなると、自分自身のことも、他の誰のことも、愛せなくなってしまう。劣等感は、自分を劣っていると見下す心の病である。

（テック・ナット・ハン）

＜解説＞劣等感や優越感も心の病、誤った心の状態。共通するのは、他との比較で生じている点。どちらにしても視点がずれており、苦しみを生む。本当の自由とはこうした病からの解放である。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.28 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1387

慢心によって、自分は勝れていると思ってはならない。自分は劣っているとか、自分は等しいとか思ってはならない。自己を妄想せずにおれ。

（釈迦）

＜解説＞慢心とは、他と比較して心たかぶること。普通、自らの優位性にとらわれ執着する場合をいうが、すぐれた者に同等や、他に劣っていると考えることもいう。共通点は、比較してそこに意識が支配されているところ。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.29 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1388

すべてのものは、生きているためには養分を必要とする。わたしたちは愛の育て方を知らないならば、愛はしおれ衰えてしまう。

（テック・ナット・ハン）

＜解説＞ここで愛といっているのは慈しみの心、慈悲と置き換えてもよい。それを育て持つためには心に栄養が必要である。そのため、さまざまな教えが説かれ実践が勧められているのである。慈悲の修養、実践が求められる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.9.30 中村元記念館協力